

一般社団法人日本化学連合 2020 年度事業報告

日本化学連合が「任意団体」から「一般社団法人」に移行してから 11 年目となり、岩澤康裕会長のもと、副会長、理事、監事が協力して運営にあたり、本年度の活動を展開した。

具体的には、運営委員会ではおもに化学コミュニケーション賞 2020 の実施、企画委員会では第 14 回日本化学連合シンポジウムの企画、また将来構想委員会、政策提言・情報発信推進 WG 委員会を開催し、日本化学連合のあり方と将来像・計画についての検討を行った。

さらに、昨年スタートした化学系学協会連絡会（正会員 14 学協会、連絡会会員 9 学協会、オブザーバー参加 5 学協会）の具体的活動として、定例会議を 2 回実施した。

また、化学系学協会の連携強化、発信力強化、および政策提言の協働に向けて、また化学系学協会の会長間の横系の場として、正会員 14 学協会（約 8 万人の個人会員）の各会長から幾つかの事項について会長個人としてのメッセージとご意見を頂き、我が国の学協会の唯一の連合体としての日本化学連合の HP トップページに公開するとともに、コロナ禍の状況下、正会員 14 学協会、連絡会会員 9 学協会に対し、2 件の緊急アンケートを実施し、結果をウェブサイト公開した。

1. 会員の増減

本年度の正会員の会員数は 14 学協会、賛助会員は団体会員 2 で変わらなかったが、賛助会員（個人）1 減の 3 となった。また、化学系学協会連絡会会員数は 9 学協会では変化はなかった。

2. 日本化学連合 2020 年度活動報告

2.1 化学コミュニケーション賞 2019 表彰式

化学コミュニケーション賞 2019 表彰式は 2020 年 3 月 6 日（金）に化学会館 7 階ホールにて開催予定であった。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため延期されていたが、2020 年 8 月 4 日（火）13:00～ 14:10 にオンラインにて開催した。

岩澤会長挨拶、事務局から選考結果説明に引き続き授与式を行った。化学コミュニケーション賞 2019 受賞者の「元素周期表同好会」、「トクヤマ化楽くらぶ」、坂根 弦太氏（岡山理科大学）に賞状、賞牌と副賞が授与され、続いて、審査員特別賞受賞の「東京大学サイエンスコミュニケーションサークル CAST」に賞状と賞牌が授与された。最後に、安永 俊一氏（株）化学工業日報社 取締役 営業企画本部長）および山本 伸一氏（一社）化学情報協会 企画管理室長）からご挨拶をいただき閉会した。

2.2 化学コミュニケーション賞 2020

当連合の設立趣旨の一つである「化学関係団体が賛同して開催する事業」を強化・発展させるために、化学と化学技術に関係する啓発活動や情報発信を行うことによって、化学教育、化学産業の育成、および発展に貢献した個人ならびに団体を表彰する制度を、平成 23 年（2011 年）度に「化学コミュニケーション賞」として創設した。本年度も、運営委員会委員を中心として「化学コミュニケーション賞 2020」を企画・実施した。

[運営委員会]

委員長	関 隆広	（代表理事 副会長；高分子学会）
副委員長	関根 泰	（理事 石油学会）
委員	岡本 昌樹	（理事 触媒学会）
委員	澤本 光男	（理事 日本化学会）
委員	渡部 恭吉	（常務理事）

本年度の「化学コミュニケーション賞 2020」は、当連合の主催、（株）化学工業日報社、（一社）化学情報協会の共催、（国研）科学技術振興機構、（公社）新化学技術推進協会、（一社）日本サイエンスコミュニケーション協会および新たに（株）化学同人に後援をいただき、実施された。2020年10月1日に募集を開始し、12月10日に締め切ったところ、個人10件、団体4件、計14件の応募があった。

[化学コミュニケーション賞 2020 賞選考委員会]

- 委員長：関 隆広（名古屋大学）
委員：内田麻理香（東京大学 特任講師・サイエンスライター）
委員：岡本 昌樹（慶應義塾大学）
委員：佐藤健太郎（サイエンスライター）
委員：里川 重夫（成蹊大学）
委員：澤本 光男（中部大学）
委員：関根 泰（早稲田大学）
委員：安永 俊一（（株）化学工業日報社）
委員：山本 伸一（化学情報協会）
委員：渡辺 政隆（日本サイエンスコミュニケーション協会）
委員：渡部 恭吉（日本化学連合 常務理事）

これらの応募案件について、上記の選考委員が書面審査を行ったうえ、2021年1月7日に開催した最終選考委員会で、化学コミュニケーション賞3件（団体1件、個人2件）と審査員特別賞2件（団体1件、個人1件）を決定した。表彰式は、2021年3月9日（火）12:50～13:50にオンラインで開催した。

化学コミュニケーション賞 2020（個人）

受賞者：佐藤康子（野老(ところ)実験クラブ）、久松洋二（愛媛県総合科学博物館）、
中村恵子（野老実験クラブ）

業績の表題：からくるりん周期表の開発と普及活動

化学コミュニケーション賞 2020（個人）

受賞者：井上千加子（サイエンス・サポート函館 科学楽しみ隊）

業績の表題：家庭での再現を意識した化学教育の普及啓発

化学コミュニケーション賞 2020（団体）

受賞者：京都技術士会理科支援チーム

業績の表題：こども理科実験教室による理科支援事業

化学コミュニケーション賞 2020 審査員特別賞（個人）

受賞者：鈴木 秋弘（長岡工業高等専門学校）

業績の表題：ねむくならない化学実験による化学啓発活動

化学コミュニケーション賞 2020 審査員特別賞（団体）

受賞者：岡山県立玉島高等学校科学部連携サイエンスチーム “たまっころぼ”

業績の表題：高校から地域社会に化学の輪を広げる活動

化学コミュニケーション賞 2020 表彰式

日時：2021年3月9日(火) 12:50～13:50 (12:40 開場)

開催方法：オンライン開催 (ZOOM)

主催：(一社) 日本化学連合

共催：(株) 化学工業日報社、(一社) 化学情報協会

後援：(国研) 科学技術振興機構、(公社) 新化学技術推進協会、(一社) 日本サイエンスコミュニケーション協会、(株) 化学同人

司会：里川重夫 (化学コミュニケーション賞選考委員会委員)

<12:50～12:55> 会長挨拶

岩澤 康裕 (日本化学連合会長)

<12:55～13:00> 選考結果報告

関 隆広 (化学コミュニケーション賞選考委員会委員長)

<13:00～13:10> 授与式

岩澤 康裕 (日本化学連合会長)

<13:10～13:45> 業績紹介 (紹介5分、質疑2分)

化学コミュニケーション賞 2020 (個人)

「からくるりん周期表の開発と普及活動」

佐藤康子 (野老実験クラブ)、久松洋二 (愛媛県総合科学博物館)、中村恵子 (野老実験クラブ)

化学コミュニケーション賞 2020 (個人)

「家庭での再現を意識した化学教育の普及啓発」

井上千加子 (サイエンス・サポート函館 科学楽しみ隊)

化学コミュニケーション賞 2020 (団体)

「こども理科実験教室による理科支援事業」

京都技術士会理科支援チーム

化学コミュニケーション賞 2020 審査員特別賞 (個人)

「ねむくならない化学実験による化学啓発活動」

鈴木秋弘 (長岡工業高等専門学校)

化学コミュニケーション賞 2020 審査員特別賞 (団体)

「高校から地域社会に化学の輪を広げる活動」

岡山県立玉島高等学校科学部連携サイエンスチーム “たまっころぼ”

<13:45～13:50> ご挨拶

安永 俊一 ((株) 化学工業日報社 取締役 営業企画本部長)

山本 伸一 ((一社) 化学情報協会 企画管理室長)

2.3 第13回日本化学連合シンポジウム

本シンポジウムは企画委員会が担当し、「AI、IoT 活用による実験のスマート化」を主題として、「化学実験」に焦点を絞り将来の実験室像についての議論を企画し、2020年3月6日に開催予定であった。しかしながら、上述の表彰式と同じく新型コロナウイルスの感染拡大防止のため延期されていたが、2020年10月23日(金) 13:00～18:00にオンラインで開催した。

1) 「実験データの電子化とその活用」笠井俊宏氏 (ダッソー・システムズ(株))、2) 「大学において電子実験ノートをいかに利用するか」山口潤一郎氏 (早稲田大学)、3) 「有機合成化学者が欲しいデータベースとは」松原誠二郎氏 (京都大学)、4) 「AI・ロボット技術を活用した新化学の展開」高橋孝志氏 (横浜薬科大学)、5) 「スモールデータの壁を乗り越えるためのMI技術」吉田 亮氏 (統計数理研究所) からご講演頂いたのち、最後に総合討論「研究室内での実験データの蓄積・有効利用・・・AI、IoT 技術を用いた実験の効率化」を行い終了した。

2.4 第 14 回日本化学連合シンポジウム

本シンポジウムは企画委員会が担当し、第 14 回シンポジウムとして、「化学研究・教育マネジメントーコロナで変わった研究と教育ー」を企画した。

科学者の「研究力」向上が各所で議論されているが、研究の進展には個人の研究力のみならず、研究マネジメントが大きな役割を持つことが広く認識されている。また、大学において学生に系統的な知識を修得させるためには、教育についてもシステムティックなマネジメントが必要とされている。さらに、今回の COVID-19 の蔓延は、大学や研究機関での研究や教育のあり方を大きく変えてきた。COVID-19 対応の 1 年を振り返り、今後の化学の研究、教育のあり方を、「研究、教育マネジメント」という視点から議論した。

[企画委員会]

委員長	長谷部伸治	(代表理事 副会長；化学工学会)
副委員長	岩田 忠久	(理事 繊維学会)
委員	窪田 好浩	(理事 日本ゼオライト学会)
委員	菅原 義之	(理事 日本セラミックス協会)
委員	入江 寛	(理事 電気化学会)
委員	松方 正彦	(理事 日本膜学会)
委員	渡部 恭吉	(常務理事)
オブザーバー	岩澤 康裕	(代表理事 会長；日本化学会)

第 14 回日本化学連合シンポジウム

「化学研究・教育マネジメントーコロナで変わった研究と教育ー」

日時：2021 年 3 月 9 日 (火) 14:00~17:50

開催方式：オンライン開催

主催：(一社) 日本化学連合

共催：(依頼中) 早稲田大学、化学工学会、クロマトグラフィー科学会、高分子学会、触媒学会、石油学会、繊維学会、電気化学会、日本エネルギー学会、日本化学会、日本ゼオライト学会、日本地球化学会、日本膜学会、日本薬学会

協賛：日本セラミックス協会

<14:00~14:05> 会長挨拶

日本化学連合会長 岩澤 康裕

<14:05~14:10> シンポジウム趣旨説明

日本化学連合副会長・企画委員会委員長 長谷部 伸治

<14:10~14:45>

1) 「COVID-19 で加速するオープンサイエンスと科学のデジタルトランスフォーメーション」
文科省 科学技術・学術政策研究所 林 和弘

<14:45~15:20>

2) 「大型プロジェクトのマネジメントについて - JST ACCEL PM として思うこと」
京都工芸繊維大学 松川 公洋

<15:20~15:55>

3) 「今後の大学運営における研究マネジメント職」
早稲田大学 喜久里 要

<15:55~16:05> 休憩

<16:05~16:40>

4) 「新型コロナ下での実習事例：遠隔授業と対面実習のハイブリッドの試み」

山梨大学 大山 拓次

<16:40~17:15>

5)「コロナ対策への化学の貢献—感染・医療崩壊・コンタクトトレーシングのキネティクス解析」

筑波大学 中村 潤児

<17:15~17:45>

6) 総合討論

「化学研究・教育マネジメント —コロナで何がわかったか、何が変わったか」

<17:45~17:50> 閉会の挨拶

本化学連合副会長 関 隆広

2.5 将来構想委員会

2021年2月9日(火)に将来構想委員会を開催し、今後化学連合として展開すべき活動について検討した。

その結果、各学会が発行しているジャーナルのプレゼンスの改善のため、化学連合ウェブサイトのトップページに各学会のジャーナルのリンクを張り、日本の化学系ジャーナルのバラエティを示す。横串の活動として「分離の化学と化学技術」などのシンポジウムを企画委員会に提案し、合同で企画していく。化学連合を中心とした環太平洋化学フェスタ開催について検討する。学術会議との連携について検討する。化学連合のサポータティブな活動として、日本化学連合HPに公募情報サイトを設け、公募をかけたい先生が掲載したい場合の受皿とする。退職された化学系人材の活用について、化学連合が寄与できないか検討を続けるなどを検討し、今後の活動に展開する。

[将来構想委員会]

委員長	黒田 一幸	(代表理事 副会長；日本セラミックス協会)
副委員長	大塚 浩二	(理事 クロマトグラフィー科学会)
委員	平尾 雅彦	(理事 化学工学会)
委員	鈴木 慎一	(理事 日本化学会)
委員	丸山 厚	(理事 高分子学会)
委員	鍵 裕之	(理事 日本地球化学会)
委員	吉松賢太郎	(理事 日本薬学会)
委員	渡部 恭吉	(常務理事)
オブザーバー	岩澤 康裕	(代表理事 会長；日本化学会)

2.6 政策提言・情報発信推進WG委員会

2021年2月24日に委員会を開催し、以下の4項目について議論した。

1. 内閣府に対する提言の検討

下記の2つの提言は学術会議が提言してから、既に2年が経過しているが、内閣府の動きは認められない。再度、化学連合からこの提言を提出し、検討を促したい。

1) 収支相償基準の弾力的な運用を認める事

「発生した剰余金の複数年度解消を容易にするための要件緩和」、「細分化された公益目的事業の剰余金は、当該法人の公益目的事業全体として使用できること」、「複数の公益目的事業を1つに統合する場合には変更の届出で済ませられること」

2) 有休財産の保有制限の緩和

「学協会の安定した財務運営を確保するため、公益目的事業費相当額の3年分保有を認めること」

討議の結果、WGとして提言文(案)の作成⇒化学連合理事会(3月9日開催)で承認⇒化学連合正会員学協会に問い合わせ。同時に地球科学連合、情報通信学会、物理系の連合体、生物科学連合などの他分野にも声をかけるプロセスで進めることになった。

2. 文科省に対する提言の検討

提言案は以下の2点である。

- 1) フェローシップ（給付型奨学金）を博士課程学生の全員に支給する（各大学は、博士評価を厳正に行う、また国際的レベルの博士学生を育成するためのプログラムを明示することが前提）
- 2) 博士課程の学費相当額を各大学に手当てする（博士学生は実質授業料無し）

討議の結果、総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）が、「研究力強化・若手研究者支援総合パッケージ」を令和2年1月23日に決定した提言では、修士課程から博士課程に進学する学生の約50%に給付型奨学金を手当てするとなっており、令和3年度の予算に反映されるかどうかを待って案文を作成することになった。

3. 各学協会に対する提言の検討

- 1) 出版、会計、会員管理など共通した事務業務の統合（必要アウトリーチ共通業者の入札など）

これについては、2017年度に検討されて難しい問題が多いという結論が出ている。しかし、正会員学協会へのアンケートでは、再び要望が出ているので検討する必要がある。核になる学会への委託、共通業者に委託、経営統合などいろいろ可能性がある。本件は、運営委員会のマターになるので運営委員会にて検討することになった。

4. JCIA および各学協会に対する提言の検討

- 1) 日本化学会、JCIA（日本化学工業協会）と合同して、産官学の環太平洋化学フェスタ（Pacific Rim Chemical Festa）を5年毎に開催（文科省、経産省が後援）（収益金は会員学協会に配分）について検討した。

注：Pacifichem や国際会議のほとんどは全て学術集会。化学フェスタは産業界中心の産官学の情報交流会、産学合同企画の学術交流会、技術交流会、展示、ポスター賞、海外学生リクルートなど、学術集会としての国際会議とは異なる視点。

討議の結果、本件については、時間をかけて議論し何年かけても始めたいので、継続審議とすることになった。

[政策提言・情報発信推進WG]

委員長	岩澤 康裕（代表理事 会長；日本化学会）
委員	関 隆広（代表理事 副会長；高分子学会；運営委員会委員長）
	長谷部伸治（代表理事 副会長；化学工学会；企画委員会委員長）
	黒田 一幸（代表理事 副会長；日本セラミックス協会；将来構 想委員会委員長）
	鈴木 慎一（理事 日本化学会）
	吉松賢太郎（理事 日本薬学会）
	関根 泰（理事 石油学会）
	入江 寛（理事 電気化学会）
	鍵 裕之（理事 日本地球化学会）
	渡部 恭吉（常務理事）

2.7 化学系学協会連絡会

化学系学協会の幅広いネットワークが必要な時代となっている現状を考え、化学系各学協会事務局の連携、情報交流などを目的として、「化学系学協会連絡会」を2018年に発足した。本連絡会は、政府政策等の学協会への情報提供、学協会のプラットフォーム整備のための情報共有、学協会の連携強化などを行い、日本化学連合の会員学会のみならず、多くの化学系学協会にご参加頂くことにより、日本の学協会の発展に寄与したいと考え活動している。

化学系学協会連絡会には、正会員 14 学協会に加え 9 学協会が参加し、さらに 5 学協会がオブザーバーとして参加している。2020 年度の連絡会幹事会は常任幹事 3 名と幹事 1 名で運営を行った。

参加学協会：

日本化学連合参画 14 学協会、火薬学会、錯体化学会、DVX α 研究協会、
日本ケミカルバイオロジー学会、日本表面真空学会、日本放射化学会、日本放射線化学会、
表面技術協会、粉体粉末冶金協会

オブザーバー参加学協会：

安全工学会、資源・素材学会、日本農芸化学会、日本分析学会、有機合成化学協会

[連絡会幹事会]

常任幹事	重光 英之	(化学工学会 理事・事務局長)
常任幹事	平坂 雅男	(高分子学会 代表理事常務理事・事務局長)
常任幹事	鈴木 慎一	(日本化学会 事務局長)
幹事	末澤 寛典	(触媒学会 常務理事・事務局長)
事務局	渡部 恭吉	(常務理事・事務局長)
オブザーバー	岩澤 康裕	(代表理事 会長 ;日本化学会)

本年度は幹事会を 3 回、定例会議を 2 回開催した。

化学系学協会連絡会 2020 年度第 1 回定例会議

日時：2020 年 12 月 22 日 (火) 10:30~12:20

会場：オンライン開催

テーマ：「コロナ下での学会運営と今後の課題」

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行により、コロナ禍での各学協会の運営の考えや課題と方策が見えてきたので、第 1 回定例会議では、主な学協会からコロナ禍での学会運営状況と今後の課題についてプレゼンテーションを行い、情報の共有をおこなった

プログラム：

10:35~10:55 日本化学会 鈴木慎一
10:55~11:15 化学工学会 重光英之
11:15~11:35 高分子学会 平坂雅男
11:35~11:55 石油学会 松岡 徹
11:55~12:15 電気化学会 高見澤正

化学系学協会連絡会 2020 年度第 2 回定例会議

日時：2021 年 3 月 24 日 (水) 10:00~12:00

会場：オンライン開催

テーマ：「コロナ禍で変わった事務局運営—改善のヒントを学ぶ
：テレワーク・勤怠管理・インフラ整備など」

連絡会参加学協会 (23 学協会) へ「コロナ禍での種々の問題に対するアクションとその結果、今後の課題」についてアンケートを実施し、11 学協会から回答をいただいた。第 2 回定例会議はアンケート結果を反映させたプレゼンと討論を行い、情報を共有した。

プログラム：

10:05~10:20	アンケート結果のご報告	事務局
10:20~10:45	コロナ禍での勤怠管理（就業規則、在宅勤務時の勤怠管理など）について	石油学会
10:45~11:10	リモートワークのためのインフラ整備について	日本化学会
11:10~11:35	アプリケーションソフトによる業務効率化について	化学工学会
11:35~12:00	オンライン学術講演会の拠点を事務局とするためのインフラ整備について	高分子学会

2.8 日本化学連合正会員（14学協会）会長のメッセージ依頼・掲載

日本化学連合では、化学系学協会の連携強化、発信力強化、および政策提言の協働に向けて、また化学系学協会の会長間の横糸の場として、正会員14学協会（約8万人の個人会員）の各会長から幾つかの事項について会長個人としてのメッセージとご意見を頂き、我が国の学協会の唯一の連合体としての日本化学連合のHPトップページに公開した。各会長には、(1)学協会会長としてのメッセージ、(2)貴学会の使命と現状の課題、(3)現学会は蛸壺化、閉塞感を打破し、最新研究・教育の場となりえるか、(4)政策提言・要望、(5)化学連合へ期待することに対してのご意見をA4 1頁以内でお願いした。

各学協会会長メッセージは下記URLに掲載中。

<https://www.jucst.org/messages.php>

2.9 緊急アンケートの実施

日本化学連合事務局では、コロナ禍の状況下での情報共有化のため、正会員14学協会、連絡会会員9学協会に対し、2件の緊急アンケートを実施し、結果をウェブサイトに公開した。

①「コロナウイルス感染拡大防止の状況下における、社員総会開催状況」

https://www.jucst.org/media/4th_report_annual_general_meeting.pdf

②「秋の年会（或いはそれに相当するもの）の開催方法」

https://www.jucst.org/media/5th_report_2020_autumn_annual_meeting4.pdf

3. 会計

収入の部

正会員学協会、賛助会員（団体）、賛助会員（個人）、化学系学協会連絡会会費は予算通りの収入があった。さらに、本年度も（株）化学工業日報社および（一社）化学情報協会より、当連合主催事業「化学コミュニケーション賞2020」の活動に対して共催金として100万円（@50万円×2）の補助を受けた。また、講演会等収入については以下のとおりであった。昨年度開催予定であった第13回日本化学連合シンポジウムは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため延期されていたが、2020年10月23日（金）に開催し、119,000円の参加費収入があった。また、本日開催の第14回シンポジウム参加費として42,000円の収入があったが、対予算339,000円の収入減となり、当期収入合計は5,324,866円であった。

支出の部

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、会議はすべてオンラインで開催した。その結果、会議費は予算額に比して約64万円の減少となった。事業費は、昨年度開催予定の化学コミュニケーション賞2019表彰式を2020年8月4日（火）にオンラインにて開催し、賞金など30万円、また、化学コミュニケーション賞2020の支出として74万円の計104万円の支出であった。一方、延期された第13回日本化学連合シンポジウムを2020年10月23日（金）に開催し、講演謝礼として4.5万円、第14回日本化学連合シンポジウムの経費として4.5万円の計9万円の支出となった。この結果、事業費合計は、予算額に比して約150万円の支出減とな

った。

一方、管理費合計は、予算額に比して30万円の支出増となった。これは今年度から、日本化学連合の事務所が化学会館内で独立したため、毎月の賃料、光熱費、共益費、インターネット環境の整備・維持費が発生したこと、および化学会館内事務所の敷金として49万円が発生したためである。一般会計の収支差額に計上しているが、敷金は貸借対照表において「その他の固定資産」として評価されるため、正味財産の減少とはならない。

この結果、当期支出合計は5,256,920円となり、対予算約113万円の支出減となった。

結局、当期収支差額は約7万円のプラスとなり、次期繰越金は6,053,369円となった。なお、化学会館の敷金を考慮すると当期収支差額は約56万円のプラスであった。

4. 処務の概要

4.1 定時社員総会	1回
通常理事会	4回

4.2 理事19名、監事2名

4.3 委員会など

運営委員会	1回
企画委員会	4回
将来構想委員会	1回
政策提言・情報発信推進WG委員会	1回
化学コミュニケーション賞最終選考委員会	1回
化学系学協会連絡会幹事会	3回
化学系学協会連絡会定例会議	2回
監査会	1回

以上